人自から出て、吳々と見くばりするときは、見物人も泣かないでは居れぬではないかと土岐君が常に話されたのである。

士農工商を問はず、其職業の種類如何を問はず、仕事になり切て人と物と一所になつて發展進歩するのは、神人合一の至道で、是でなければ、大發明も出來ず、殖民も貿易も出來ず、政治に善政を望むことが出來ず、宗教に眞信仰を得られぬと信ずる。

回教とは如何なるもの乎

大川周明

一　回教の名稱

回教は人も知る如く亞剌比亞の偉人ムハムマッドによつて唱へられた宗教で、開教の年代は今を距る約千三百年以前、即ち西曆第七世紀の前半である。回教と云ふ名稱は、昔支那人が此宗教を奉じたる回疆地方の民と始めて交際した時、回人の宗教と云ふ意味で回教と呼んだのを其儘に襲用するので、恰も西洋人の宗教と云ふ意味で基督教を西教と呼ぶと一般である。支那の回教徒自身は、回教を清眞教と稱し、其會堂を清眞寺と呼んで居る。而して元來亞剌比亞語ではムハムマッド教のことをイスラーム、其の信者のことをムスリムと呼んで居るが、此等の兩語は共に『身を委ねる』、『己れを沒却する』、『全く服從する』等の意味を有する働詞の不定法及び分詞で、前者は『全然神意に隨順する事』と云ふ意味、

後者は『同上しつゝある者』と云ふ意味である。

二　回教の現勢

初期に於ける回教の傳道は、主として劍によりて成就されたが、此事は宗教と政治とを善惡兩樣の意味に於て極めて密接に結合した。その結果、回教は他教には其例を見ざる速度を以て四方に弘まり、領土の發展に隨伴して信者の數も激增し、殆ど四海を統一せんばかりの勢であつたが、其後回教諸國の政治的衰頽と共に、回教其者も衰運に赴き、今日に於ては、復た昔日の隆盛を見ることが出來ぬ。さり乍ら衰へたりと雖も、尙ほ世界三大宗教の一として、少くも二億萬以上の信者を有し、且他教に見る可からざる宗教的特色を具へ、容易に其の將來を逆睹すべからざるものがある。殊に今日の回教徒は多年歐洲列强の爲に甚だしき壓迫を加へられて來たことを憤慨して居た矢先に、今度の歐洲戰爭開始以來、獨逸が有らん限りの力を盡して之を自國の味方とし、聯合諸國側の治下に在る回教徒を煽動して獨立運動を起させやうと企てゝ居るのであるから、回教並に回教徒の事情は、吾等には極めて興味ある研究問題である。現に今年の一月七日には、アルゼリア及びチユニスの人民が結束して、伯林に回教徒の大示威運動を開催し、チユニスの王族サレットは、北阿弗利加の歷史を說き來りて北阿諸民族の蹶起を叫び、群がる阿弗利加人印度人を熱狂せしめたとの事である。

回教徒の數は固より精確なる計算を不可能とするが、恐らくは二億二千萬を下るまい。いま最も信賴す可き統計によりて各大陸に於ける信者數を擧げ、回教徒の地球の表面に於ける分布の有樣を示せば下の如くである。

歐羅巴	一二・九九一・〇〇〇人
亞細亞	一五八・一四三・〇〇〇人

「道」第95号(1916.3)

阿弗利加	五二・七七八・〇〇〇人
阿米利加	五七・〇〇〇人
濠洲及太洋洲	一九・〇〇〇人
總計	二二三・九八八・〇〇〇人

右のうち、歐羅巴に於ける回教徒の大部分は、露國、土耳古、及び巴爾幹半島諸國に住し、英佛其他に住するものは七千乃至八千人に過ぎぬ。

亞細亞に於ては、亞細亞土耳古、亞剌比亞、阿富汗斯坦、波斯、印度、南洋諸島、及び支那に最も多く、支那だけでも約二千三百三十三萬二千人と算せられ居る。亞細亞は回數の最も行はれて居る大陸で總信者の過半數は亞細亞諸民族を以て占めて居るので、日本のみを除外例として、自餘の至るところに勢力を得て居る。暹羅の如きも全國の總人口六百萬のうち、百萬は回教徒、英領印度の總人口のうち、約六千萬は同じく回教徒である。

阿弗利加に於ては、現に總人口一億二千萬の約半數が回教を奉じて居るが、該大陸は現に回教の最も熱心なる傳道地であつて、年々驚く可き多數の改宗者を得て、之がために基督教傳道者の激しき嫉視を受けて居る。

亞米利加及び濠洲太洋洲に於ては、回教は未だ根本的に其信仰の根を下ろして居らぬ。此等の大陸に於ける信者として前に掲げたのは、殆ど全部歸化せる亞細亞國民に外ならぬ。

三　回教の宗派

今日の回教はスンニ教及びシアー教の二大派に分れて居る。スンニ教は西曆第八世紀の後半、アッバース家の第二世教主マンスールによりて基礎を置かれ、該王朝の隆盛と共に勢力を得たが、其後モンゴル人の侵入に會ひてアッバス家は亞細亞より追出され、同家の一人が埃及に逃れて教主の名を維持して居たが、其後更に土耳古人が政治的には小亞を征服

し、精神的には回教に歸依するに及び、第八世埃及教主は、有名なる土耳古皇帝セリムに、教祖ムハムマッドの印璽、外套、及び杖を讓りて教主の位に卽かしめた。此時卽ち第十六世紀末以來、代々の土耳古皇帝は一切のスンニ教徒の精神的首長として仰がれて今日に及んで居る。而して波斯を除く殆ど總ての國土に行はれる回教は、皆なスンニ教である。而してシアー教は教祖の養子アリーを開祖とするもので、今日は波斯の國教として專ら同國に行はれ、波斯國王を以て教主と認めて居る。

兩教分立の原因は、教祖ムハムマッドが何等後繼者に關する遺言なくして世を逝りしが故に、信者の間に教主相承の爭ひを生じ、或者は撰擧によりて之を定むべしと主張し、他の者は教祖の血統を引ける者を相續せしむべしと主張したことに存する。前者は後にスンニ教となり、後者はシアー教となつた。今日では長い間の歷史的事情の纏綿により、當初とは異なれる意味の對立となつて居る。要するに此の分立は、根本に於て宗教的のものに非ずして、寧ろ政治的のものである。

次に如上兩教は更に夫々の宗旨に分れて居る。この分立は教理、儀式に關する解釋の相違に基くもので、スンニ教の方にはハニファー、シァーフィイ、マリク、ハンバルの四大派がある。ハニファー派は土耳古帝國及び印度に行はれ、シァーフィイ派は南洋諸島に、マリク派は北部亞弗利加に、ハンバル派は主として亞剌比亞內地に行はれて居る。如上四派は回教の正統派であるが、其他にも少數の分派がある。此等の四派は儀式の方法や教理の說明に於て夫夫異なる所あるけれども、決して互に反目するやうな事はない。現にカイロの回教大學院に於ては四派の學者の組織を教授して居る。

シアー教の方も亦數派に分れて居るが、其の最も有方なるはアスナーアーシャリア派と呼ばるゝ波斯

國教派である。

以上の外、吾等が回教に關する記事を讀み居る時に屢々遭遇するのは、アシャール派及びムッタザル派と云ふ名稱である。これは具體的の分派のことではなく、回教神學に關する進歩派及び守舊派に加へられる稱呼であつて、スンニ教の正統諸派は皆なアシャール派と呼ばれ、正統神學に對して進歩的見解を抱く回教内の自由思想家の諸派は皆なムッタザル派と呼ばれるのである。兩派の神學の相違は、通俗を主とする此文で述べなくとも宜からう。

四　回教の聖典

さて以上の如く大小の分派はあるが、其等の分派に共通なる聖典は哈蘭である。クラーンとは『讀む可きもの』と云ふ意味で、全篇を通じて百十四章、各章の長矩極めて不同にして、短かきは僅々數節より成り、最も長きは二百八十六節より成つて居る。哈蘭の中に記されたる所によれば、天上に一切の知識を藏めたる『母書』ありて、天使長ガブリエルが神の命令の下に、時に應じて其の母書の片鱗をムハムマッドに傳へたのが卽ち哈蘭である。從つて其の一言一句も悉く神に出でたるは言ふまでもない。回教徒の哈蘭を聖視することは吾等の想像以上で、一切の學術、一切の知慧、並に一切の法律の淵源なりと信じて居る。

哈蘭は固より當初より現存の秩序體裁を有して居たのではない。始めムハムマッドの天啓を受くるや之を其の信者に傳へ、信者は之を暗誦し、又は骨や皮などに書寫しただけであるから、ムハムマッド當時には、僅かに數節又は數章を記せる斷片があつたに過ぎぬ。尤も中には大部分を暗誦して居た人もあつたらうが、全部を暗誦することは不可能事と思はれる。其上に口から口へ傳はり行く間には種々なる訛傳もあつたであらう。

事情かくの如くなりし上に、ムハムマッドが一度び世を逝るや、教主繼承の爭ひ直ちに起り、親しく彼に師事して哈蘭に通じたる故老の、命を戰場に殞すもの多かつたので、ムハムマッドに次いで教主に推されたアブー・バクルは、ムハムマッドの書記たりしザイドに命じ、其の散佚を防ぐために哈蘭の集輯に從はしめた。かくして始めて一卷の哈蘭が出來上つた。

ザイド編輯の哈蘭は、多くの回教徒に複寫せられ亞剌比亞の各地に行はれたが、其後教徒の間に多くの異なれる解釋を生じ、各々其の見る所に從つて哈蘭を改正し、茲に種々なる哈蘭の出版を見るに至つた。そこで當時の教主ウトマーンは、全回教徒に通ずる聖典を欽定する必要を感じ、更に前記ザイド及び他の三名に命じて證典たるべき哈蘭の編輯に從事せしめた。彼等は命を奉じて能ふ限り流布の哈蘭を集め、彼此を參酌し異同を考覈して茲に新たに一卷の哈蘭を大成した。ウトマーンは之を亞剌比亞の各地に配布して證典たらしめ、同時に他日異論の發生を防ぐために一切の自餘の寫經を滅却して仕舞つた。今日吾等に傳はるものは、卽ち此のウトマーンの欽定哈蘭である。

五　回教の骨子

哈蘭は言ふまでもなく回教々理の總括で、全回教徒の信仰の根柢であるが、其中に現はれて居る教義を總括すれば、信の方面では四信條、行の方面では五戒律、この二門に攝することが出來る。此等の四信條及び五戒律は、一切の大小分派に普遍なる回教の骨子である。

然らば四信條とは何ぞ、曰く第一に神を信ずること、第二　靈魂の不滅を信ずること、第三に神の掟を守ること、第四に死後の審判を信ずること、約言すれば信神・永世・修德・應報、卽ち是である。次に五

戒律とは何ぞ、曰く第一に清淨、第二に祈禱、第三に布施、第四に斷食、第五に巡禮、この五事である。而して右の外に飲酒と賭博とは最も嚴格に禁ぜられて居る。

回教の要領は殆ど之に盡きて居る。神の唯一なるを信じ、ムハムマッドの豫言者なるを信じ、而して五事の掟を守るものは、卽ち立派な回教徒となつたのである。回教の傳播が驚くべく迅速なりし一原因は、其の教義が爾く簡單なることに存して居る。現に阿弗利加に於ける回教傳道の實際に於て之を見ても分る。各派の回教徒は皆な如上の簡明な教義を旗印として異人種に宣教して居る。然るに一方の基督教の方は、各派の傳道者が孰れも異なつた教義を以て面倒な說教を試み、大同を忘れて小異に拘泥して居る。黑人の方では兩教とも初めて耳にするのであるが、一方は誰の口からも同一の事を聽くし、他人は人によつて言を異にすると云ふ風であるから、勢ひ回教の方を眞實らしく思ふやうになる。それで今日では年々回教に歸依する黑人の數が、督基教に改宗するものよりも遙かに多數に上つて居る。この事實に驚いて、一昨年のこと、東部阿亞利加のキクユー地方に派遣されて居る英國各派の宣教師が、回教に對抗するために共同の信仰箇條を定めやうとしたが、偶々それが本國宗教界の大問題となつて、所謂キクユー事件なるものを生じた事があつた。

右の如く回教の教義は簡單ではあるが、唯だ四信條と五戒律とを並べた丈では、文字通りに骨子を示すに止まるから、以下項を追うて此の骨子に多少の皮肉を附して見やう。

六　神及び豫言者

回教の神はアルラーの名を以て呼ばれ、舊約聖書のヱホバと殆ど同一の神格である。そは天地の創造者、萬物の主、大慈大悲者、世界の監視者、一切知

者、一切能者、死後の審判者であつて、此神の外には決して神がない。アルラー以外に神ありとして之を拜するは、有らゆる罪惡の最も重き者である。此獨一神の周圍には無數の天使が居つて、常に此神を讚美し其命を奉行して居る。天使の體は光明より成り、純潔無垢にして體慾を有して居らぬ。天使の下には火にて創造された精靈が居る。神通力を有して居るけれど、人間と同じく體慾を有し、且人間と同じく死すべき者で、信者と不信者とがある。人間はもとゝ神によりて造られたる最勝の存在であつて、初めは天使及び精靈の上に位して居たが、アダムの墮落によりて宿罪のために累はされ、罪に赴くの性情を得た。而して常に惡魔のために誘惑せられて、愈々無智と罪惡とに沈淪するのである。

然るに大慈大悲なるアルラーは、深く人間の墮落を憐み、人間に眞理を敎へて、無智と罪惡とより救ひ出すために、豫言者を下し給ふのである。アブラハム、モーゼ、耶蘇の如き、皆な是の如き意味の豫言者で、その最後に出でゝ最も偉大なるはムハムマッド其の人である。而して是の如く豫言者の相次いで起るのは、其の敎へたる眞理が年月を經る間に種々なる厭ふべき粉飾を施され、之が爲め本來の面目を失ふやうになるので、第二第三と順次に新たなる豫言者を下して、永遠に純淨なる眞理を提唱せしめ、次第に相傳へてムハムマッドに至つたのである。されば若しムハムマッドによりて復興せられし眞宗敎が、また外物のために蔽はれるやうな事となれば、更に新しき豫言者を人界に下して、宗敎革新の大業に當らしめ給ふのである。而して此の豫言者の現はれざる以上、ムハムマッドの敎は絕對の眞理であつて、耶蘇若し再び世に出づるとも之を奉ずべきものなりと爲られて居る。

かく神は人間を憐れみて豫言者を下し給ふた。豫言者の敎は、神によりて定められし人間の踏む可き

路を示すものである。基督教の『主の禱』に相應する回教の祈禱は下の如きものである。曰く、『神は讃むべきかな。そは諸世界の主、大慈者、大悲者、審判の日の王なり。吾等なんぢを拜し、拯救を爾に求む。吾等を導きて正しき路、璽が恩寵を垂れ給ふ者の路、爾の怒に觸れざる者、迷はざる者の路を踏ましめ給へ』。眞の宗教は卽ち『正しき路』である。不信者は卽ち『神の怒に觸れたる者』また『迷へる者』である。されば人々はムハムマッドの教へたる正しき信仰を抱き、其の定めたる律法を守り、無智と罪惡とより遠ざかりて、眞の人間となる爲に刻苦奮鬪せねばならぬ。

七　靈魂不滅と死後應報

肉體は朽ちて其形を失ふとも、人間の靈魂は決して滅びぬ。人間の生命が現世のみで終始すると思ふのは恐るべき謬想である。人間が此世に於て行へる一切の行爲は、大小漏らさず神の知悉し給ふ所である。而して人間は死後に於て、必ず生前の善業惡業に對する審判を受け、善人は天國に上り、惡人は地獄に墮ちねばならぬ。哈蘭の中には、天國の歡樂、地獄の苦惱が、最も力を籠めて描き出されて居る。曰く『審判の日至らん、其時各人その爲せる所を想起せん、地獄その前に現はれん。凡そ行ひて正しからざりし者、地上の快樂を貪れる者、彼等の住家は地獄なり、主の審判を畏れ、諸々の欲を克服せる者、彼等の住家は樂園なり』（七九章第三四—四一節）。而して樂園に住んで神座の近くに居る者の多幸なる有樣を說いて下の如く述べて居る。『彼等は莊嚴せられたる座褥の上に相對ひて坐し、永遠に老いざる若き人々これを圍みて、杯盤及び醇酒を湛えたる盃を献ぐ、此酒は頭痛せしめ又昏醉せしむる事なし、また望むが儘の果實、欲するが儘の鳥肉を献ぐ、而して貝の中の眞珠に類ふべき大なる眼もてる處女を善

行の報償として賜はる、彼等此處にては愚かなる言語又は罪惡を耳にせず（五六章第一五—二四節）』。さり乍ら天國に於ける至上の幸福は、決して是くの如き五感の滿足を與へられるからでない。基督教の人人は、單に此等の叙述のみを擧げて回教の天國觀を低級なるが如く貶しく居るけれど、哈蘭の中に明白に如上の快樂が決して至高の幸福に非ずして、神と偕に在ること、目の當り神を拜しつゝ生くることが實に最も根本的なる幸福であると記して居る。

地獄の恐るべき光景も、亦最も具體的に述べられて居る。曰く『彼等は熱風の間、黑煙の蔭に置かる、彼等はザックムの果實を食ひて其腹を滿たし、渴ける駱駝の如く惶たゞしく熱湯を飲まむ』、曰く『彼等は焦熱地獄に墮せん、汝等焦熱地獄の何たるを知るが、そは炎々として燃ゆる熱火なり、そは汝等の皮膚を碎き、嚙み、且燒かむ』と。之に日本語に翻譯すれば、亞剌比亞語の語勢の音調とを失ひ盡すから何でもなく聞えるが、勇猛無比なる亞剌比亞の戰士が靜かなる夕暮れ、人家の前を過ぎりて地獄の苛責を述べる此等の章句を誦するを漏れ聞けば、相抱きて流涕哭泣すと云ふによりても、地獄に墮すると云ふことが、如何に回教徒を戰慄せしむるかを推度することが出來やう。

さり乍ら神が人間を地獄に陷れるのは、決して之を憎むために非ずして、却つて測り難き大愛より出てたるものである。そは斯くして迷へる靈魂を悔改めしめんが爲に外ならぬ。從つて回教では永遠の罰を說かぬ。『神の唯一なるを告白する者は、その惡業報いられたる後、地獄の火中より引出されん』。『たゞ芥子粒ほどの信仰を心に抱く者は、地獄の火中より救はれん』。

八　回教の五戒

回教徒たるものは必ず五事の掟を守らねばならぬ

ことは前述の通りであるが、今其等の掟の一々に就て簡單に述べて見やう。

第一清淨。 回教徒は物を淨穢の二つに分ち、下のものを穢れたものとして居る。一は一切の酒類。二は犬及び豚、並に彼等より出るもの。三は人、魚、及び蟋蟀以外の屍躰。四は血、膿、嘔吐物、糞。五は尿及び尿道より出づるもの、六は飲料に供すべからざる動物の乳。

回教徒は輕き穢れと重き穢れの二つを區別し、前者をハダット、後者をナガスと呼んで居る。而して下の四つの場合はハダットであつて、清淨なる水又は砂によりて洗滌した上でなければ祈禱・巡禮・哈蘭接手の三事を嚴禁される。四つの場合とは第一に尿道及び肛門より何ものでも出した時、第二に失神の場合、第三に夫婦ならぬ男女が皮膚を接觸した時。第四に躰の隱すべき處に觸れた時。また次の六つの場合はナガスであつて、沐浴によりて清淨となるに非ずば、ハダットの人に禁ぜられる三事の外に、寺院内に居ること、哈蘭を誦することを禁ぜられる。六つの場合とは、一に死、二に同衾、三に男女の四肢の接觸、四に月經、五に分娩、六に產褥惡露。此等の清淨に關する掟は他の宗教に見ざるほど嚴格なもので、色々繁瑣なる規定がある。

第二祈禱。 回教徒は毎日五回祈禱する義務がある。朝の祈禱、正午の祈禱、午後の祈禱、日沒の祈禱、及び深夜の祈禱これである。祈禱をするには先づ回教の本山メッカの方向に向つて、神を念じ乍ら直立し、哈蘭第一章を唱へ、次で双手の膝に達するまで身を屈め、次に額の地に觸るゝまで跪き、再三之を繰返したる後に、坐して告白文『アルラーは大なりムハムマッドは神使なり』を唱へ、次で豫言者に對する祈禱を捧げ、最後に『平和と神寵汝等の上に在れ』と唱へて祈禱を終るのである。

回教の安息日は金曜であるが、此日は一先導者の

下に寺院に於て公共祈禱を行ひ、丁年以上の自由民にして病者に非ざる限りは悉く之に參會するの義務を有する。先導者は祈禱を始める前に二つの説教をする定めとなつて居る。回教には僧侶が無い。之は他教と類を異にする所で、信者は總て仲介者なしに神と交はるのである。從つて金曜の祈禱會の司會者も、僧侶がやるのではなくして、一定の規定に適合して撰ばれたる俗人が先導者となるのである。

第三斷食。 丁年以上の回教徒にして心身健全なる者は斷食を守らねばならぬ。斷食は毎年一ケ月間、昔教祖ムハムマッドが始めて天啓を受けたラマダーン月（陰曆八月）に於て行はれ、日出より日沒に至るまで何等の物質をも口を通して體内に入れず、且一切の情欲より遠ざかるのである。老年者、旅行者、病者、姙娠者、及び哺乳者は斷食の義務を許される。理由なくして斷食を破れる者は、信者にして奴隷たる者を一名解放するか、二ケ月間續けて斷食するか、又は六十人の貧者を供養して其罪を贖はねばならぬ。

第四巡禮。 メッカは回教教祖の故郷で、回教の聖地である。全世界の回教徒間に、友愛同胞の情を起させるため、且又全世界の回教徒に、教祖の偉大なる使命が始めて人類に傳へられたる聖地の印象を與へるため、メッカに於ける回教聖殿の參拜は最も神聖なる信者の義務となつて居る。健康と經濟との許す自由民の回教徒は、一生に一度はメッカに巡禮せねばならぬ。遠隔の地に在る貧しき信者の如き、粒々辛苦して貯へた金を以て、メッカ巡禮に旅立つことを無上の樂しみ且誇りとして居る。

第五布施。 初代の回教國に於ては、國家の財政は不信者より徵收せる租稅を基礎とし。信者自身は國家に對する納稅の義務を有しなかつた。但し或程度以上の財產を有する信者は、己れより少なき財產を有するものゝ爲に喜捨する所なきを以て神意に背く

ものとせられ、毎年收入の一分乃至二分五厘を布施するの定めとなつた。卽ち回教徒の納稅は國家に對するに非ずして神に對するもの、國法上の義務に非ずして宗教上の義務となつた。かくして集められた收入は之を『神の財産』として、之を下の人々に分與した。(一)如上救貧稅を賦課せらるざる貧民。(二)此の徵稅を司る官吏。(三)不信者の血族を改宗せしめたる者。(四)金を拂ひて自由民たらんとする有德なる奴隸の信者。(五)教團のために負債せる者。(六)自ら進んで宗教戰爭に加はれる者。(七)扶助するものなき外國人。

併し乍ら此義務は時勢の變遷と共に今日では大いに昔日と異なる趣を呈し、或地方では純然たる宗教上の布施として支出せられ、或地方では國家に對する納稅として行はれて居る。

九 結尾

詳述すれば際限ないが、上に述べ來つたところで回教の大體を彷彿せしめ得たと信ずる。今日では回教徒の中にも立派な教養ある人物があるので、舊回教の神學に不滿を抱き、文明の思想を以てムハムマッドの信仰を解釋し、大いに其の面目を一新せしめんと努めて居る。其等の革新運動のうち最も注目す可きは、目下印度に於て行はれて居るアーマッド運動で、これは回教及び基督教が其の出現を翹望しつゝありし救世主、マーディにして同時にメシアを兼ねたる最後の豫言者と名乘りて大傳道を行つたアーマッドと云ふ宗教的偉人の思想信仰が、其死後に於て次第に勢力を得來つたのである。此等に就ては他日更に之を述べることにして、今は玆に筆を擱くことゝする。

神山守を訪ふ

村井物來

一

西郊に丘あり。神山といふ。廣袤二十五萬坪、丘に立ちて見渡せば、滿目淸爽、雲も、風も、草も、木も、宛として古しへの武藏野の面影を偲ばしむ。閑寂にして浩濶、茫漠の間自ら幽趣あり。東京の郊外此別天地あるを意外となす。此丘に不思議なる人物あり。彼れ人か神か、神か人か、人にして光あり。神にして影あり。影にして光、光にして影、彼や遂に不思議の人物なり。

此の山に人の影あり春の月

影とは A shadow and a splendor. の義なり。

大正五年一月二十八日、此山に此人を訪ふ。宮益坂下停留場にて電車を棄て、人車を驅て西に進むに、數町にして人家粗なり。路は畑の間を縫ひて野趣頻りに身に迫る。漸く坂路となり坂盡くれば卽ち丘なり。電車を棄てゝより約貳拾分のみ、徒步にて來るも參拾分を要せずといふ。此處に新築の一屋あり。これわが訪はんとする人の新居なり。主を松村介石翁となす。貳拾年莫逆の友と云はむよりは實はわが敬友なり。翁は堅く信ずる處ありて、禮拜は宗教の生命なりとの主張を執つて動かず。遂に拜天堂の建立を決す。而して翁を尊信する某富豪の寄附金を以て、多年の宿志漸く遂げられんとし、敷地